

国際ビジネス研究学会 2026 年 年頭の辞

会員の皆様、新年あけましておめでとうございます。

2026 年の年頭にあたり、謹んでご挨拶申し上げます。

昨年は、国際ビジネス環境がかつてないほど複雑かつ不確実な様相を呈した一年でありました。戦後 80 年にわたり世界経済の安定を支えてきた国際秩序が大きな転換点を迎えていることを、私たちは改めて認識させられました。

第 2 次トランプ政権による大規模な関税政策は、既存の自由貿易体制の前提を根本から問い直すものとなりました。日本企業への 15% の追加関税をはじめ、世界の主要貿易相手国に対する相互関税の発動は、グローバルサプライチェーンの再構築を企業に迫っています。PwC が指摘する「パクス・アメリカナの限界」という言葉が示すように、米国主導の国際秩序は新たな段階へと移行しつつあります。

そして年明け早々、私たちは衝撃的なニュースに接しました。1 月 3 日、米軍がベネズエラに対する大規模な軍事作戦を行い、マドゥロ大統領夫妻が拘束され国外に移送されました。中南米における地政学的緊張の高まりは、同地域に展開する日本企業にとっても看過できないリスク要因となっております。

ウクライナにおける紛争は 4 年目を迎えましたが、終結の見通しは立っておりません。中東においても、ガザでの人道危機は深刻化し、停戦と戦闘再開を繰り返す不安定な状況が続いております。これらの地域紛争は、エネルギー価格の変動、物流網の混乱、そして企業のリスク管理のあり方に直接的な影響を及ぼしています。

世界経済フォーラムの「グローバルリスク報告書 2025」は、国家間の武力紛争を最も差し迫ったリスクとして挙げるとともに、誤報と偽情報の拡散が社会の分断を深め、協力体制の構築を困難にしていると警告しています。

このような時代にあって、私たち国際ビジネス研究者に求められる役割は何でしょうか。

第一に、変化の本質を見極める分析力です。表層的な事象にとらわれず、構造的な変化を読み解く視座が必要です。第二に、実務と理論の架橋です。企業が直面する現実の課題に対し、学術的知見をもって貢献することが求められています。第三に、次世代への継承です。不確実性の時代を生き抜くための知恵を、若い世代に伝えていく責務があります。

地政学的リスクの高まりは、同時に新たな研究課題と機会をもたらしています。サプライチェーン・レジリエンス、経済安全保障、デジタル主権、そしてグローバルサウスの台頭など、取り組むべきテーマは数多くあります。

本年も会員の皆様とともに、激動の国際ビジネス環境を読み解き、学術的貢献と社会的責任を果たしてまいりたいと存じます。

皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げ、年頭のご挨拶といたします。

2026 年 1 月

国際ビジネス研究学会

会長 牧野成史